

## 「が・の」の識別 確認テスト（古典文法） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 イ（連体格）。「雀の子」＝「雀の（子）」で、後ろの体言「子」を修飾し所属を示す。「～の」と訳す。

問2 ア（主格）。「月の明かき」＝「月が明るい」。直後が活用語（形容詞「明かし」の連体形）で、その主語を示している。「～が」と訳す。

問3 同格。根拠＝「竹の」の後に「節を隔ててよごとに黄金ある竹」と続き、読点の前後（「竹の」と末尾の「竹」）が同一のものを指している。「Aの、Bなる…」の形で「～で」と訳す。

問4 訳例＝「きわめて大きな竹で、節と節との間ごとに黄金が入っている竹を見つけた。」（『竹取物語』を踏まえた学習用の改変。「竹の」は同格なので「竹で」と訳す。）

問5 イ（連体格）。「わが身」＝「私の身」。代名詞「わ」（体言）に付き、後ろの体言「身」を修飾する。

問6 主格。根拠＝直前は体言「人」だが、直後が活用語（「詠む」の已然形＋完了「り」の連体形「る」）で、その主語を示しているため主格。「人が詠んだ」と訳す。

問7 同格。現代語訳＝「白い鳥で、嘴と脚とが赤い（鳥）が、川のほとりで遊んでいる。」（「鳥の」と後ろの「赤き」＝「赤き鳥」が同一を指す。『伊勢物語』東下りの都鳥を踏まえた学習用の改変例文。）

問8 イ（連体格）。「行く川の流れ」＝「行く川の（流れ）」。後ろの体言「流れ」を修飾し、所属を示す。（※「行く」は「川」を修飾する連体修飾語で、「の」の直前はあくまで体言「川」である点に注意。）

問9 オ（比喩）。「露のごとき命」＝「露のような（はかない）命」。「～のごとし／～のように」と訳せる連用修飾（比喩）の用法。

問10 訳例＝「露のようにはかない命なので。」（「露の」は比喩で「露のように」と訳す。）

問11 ア（主格）。「人のつらき」＝「人がつれない（薄情だ）」。直後が活用語（形容詞「つらし」の連体形）で、その主語を示す。

問12 主格。「雪の降れる」＝「雪が降っている」。直後が活用語（「降る」の已然形＋完了「り」の連体形「る」）で、その主語を示す。

問13 連体格。「罪の限り」＝「罪の限り（の期間）」。後ろの体言「限り」を修飾する。

問14 主格。「涙のこぼるる」＝「涙がこぼれる」。直後が活用語（「こぼる」の連体形）で、その主語を示す。

問15 主格。根拠＝直前は体言「人」だが、直後が活用語（「許す」＋打消「ず」の連体形「ぬ」）で、その主語を示すため主格。「人が許さない」と訳す。

問16 連体格。「鶯の声」＝「鶯の声」。後ろの体言「声」を修飾し、所属を示す。

問17 連体格。「東の方」＝「東の方角」。後ろの体言「方」を修飾する。

**問18** (1) 接続助詞。根拠＝直前の「別るる」は動詞「別る」の連体形（活用語の連体形）であり、体言ではないため格助詞ではなく接続助詞と判断する。(2) 単純接続（～が）。「別れるのが、たいそう悲しい」と、前後を素直につないでいる。（文脈により逆接「～のに」とも取り得るが、ここは単純接続が自然。）

---

**問19** 連体格。「玉の緒」＝「玉を貫く緒（ひも）」。「後ろの体言「緒」を修飾する。（式子内親王の歌を踏まえた語であるが、ここでは用法のみを問う。）

---

**問20** ア（主格）。「心ざしの深き」＝「愛情が深い」。直後が活用語（形容詞「深し」の連体形）で、その主語を示す。

---

**問21** 同格＝③・⑥。いずれも「(体言) の、～なる／～き（連体形）…（同じ体言）」の形で、読点前後が同一のものを指す。

---

**問22** 比喻（～のように）＝⑧。「露のごとき命」＝「露のようにはかない命」。

---

**問23** 直前の語が体言（名詞・代名詞など）か、活用語の連体形かに着目する。体言に付けば格助詞、活用語の連体形に付く「が」は接続助詞である。（なお「の」は接続助詞にはならない。）

---

**問24** 準体格とは、格助詞「の」「が」が体言の代用となる用法で、後ろに本来あるべき体言が省略されている。「～のもの」「～のこと」と補って訳す。（例「梅の花咲けるが（＝咲いているのが）」のように、「の／が」の下にあるべき体言が略された形を指す。）

---